

公演日程

A program

第1548回 NHKホール
9/10 [土] 開演 6:00pm
9/11 [日] 開演 3:00pm

The 1548th Subscription Concert
on 10th (Sat.) & 11th (Sun.) September
at 6:00pm (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 ピンカス・スタインバーグ
ピアノ コルネリア・ヘルマン
コンサートマスター 篠崎史紀

Pinchas Steinberg conductor
Cornelia Herrmann piano
SHINOZAKI, Fuminori concertmaster

モーツァルト／セレナード 二長調 K.239
「セレナータ・ノットウルナ」(13')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
Serenade D major K.239 "Serenata notturna"

モーツァルト／ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488 (26')

Wolfgang Amadeus Mozart
Piano Concerto No.23 A major K.488

休憩

Intermission

ベルリオーズ／幻想交響曲 作品14 (49')

Hector Berlioz (1803-69)
Symphonie fantastique op.14

B program

第1547回 サントリーホール
8/31 [水] 開演 7:00pm
9/1 [木] 開演 7:00pm

The 1547th Subscription Concert
on 31st (Wed.) August & 1st (Thu.) September
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 ピンカス・スタインバーグ
テノール ヘルベルト・リップパート
コンサートマスター 篠崎史紀

Pinchas Steinberg conductor
Herbert Lippert tenor
SHINOZAKI, Fuminori concertmaster

モーツァルト／歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K.527～序曲、
ドン・オッターヴィオのアリア「彼女こそわたしの宝」(10')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
"Don Giovanni" K.527 - Overture,
Aria "Dalla sua pace la mia dipende" (Don Ottavio)

モーツァルト／歌劇「魔笛」K.620～序曲、
タミーノのアリア「なんと美しい絵姿」(11')

Wolfgang Amadeus Mozart
"Die Zauberflöte" K.620 - Overture,
Aria "Dies Bildnis ist bezaubernd schön" (Tamino)

モーツァルト／歌劇「イドメネオ」K.366～序曲、
イドメネオのアリア「海の外なる胸の内の海は」(10')

Wolfgang Amadeus Mozart
"Idomeneo" K.366 - Overture,
Aria "Fuor del mar ho un mar in seno" (Idomeneo)

休憩

Intermission

モーツァルト／交響曲 第41番 八長調 K.551
「ジュピター」(29')

Wolfgang Amadeus Mozart
Symphony No.41 C major K.551 "Jupiter"

C program

第1549回 NHKホール
9/16 [金] 開演 7:00pm
9/17 [土] 開演 3:00pm

The 1549th Subscription Concert
on 16th (Fri.) & 17th (Sat.) September
at 7:00pm (Fri.) 3:00pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 ピンカス・スタインバーグ
ヴァイオリン ドミートリ・シトコヴェツキ
コンサートマスター 堀 正文

Pinchas Steinberg conductor
Dmitry Sitkovetsky violin
HORI, Masafumi concertmaster

シベリウス／ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47 (35')

Jean Sibelius (1865-1957)
Violin Concerto d minor op.47

休憩

Intermission

シベリウス／交響曲 第2番 二長調 作品43 (43')

Jean Sibelius Symphony No.2 D major op.43



指揮 conductor

ピンカス・スタインバーグ

Pinchas Steinberg

ピンカス・スタインバーグは、ボストン交響楽団の音楽監督を務めた(小澤征爾の前任者にあたる)名指揮者ウイリアム・スタインバーグ(1899-1978)の息子として1945年にイスラエルのテル・アヴィヴで生まれた。エルサレムの音楽院で学んだ後、アメリカに渡り、ヴァイオリンを名教師ギンゴールドに師事。最初、ヴァイオリニストとして活躍し、シカゴ・リリック・オペラ管弦楽団のコンサートマスターを務めた。その後ベルリンではブラッハーに作曲を学ぶ。指揮者としてのデビューは、1974年のベルリン放送交響楽団(RIAS交響楽団)のコンサート。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団、クリーヴランド管弦楽団などの一流オーケストラに客演。1988年から93年にかけてウィーン国立歌劇場にしばしば登場。コヴェントガーデン王立歌劇場、パリ・オペラ座、バイエルン州立歌劇場などの歌劇場にも客演している。1989年から96年までオーストリア放送交響楽団(現・ウィーン放送交響楽団)の首席指揮者。2002年から今夏までスイス・ロマン管弦楽団の音楽監督を務めた(後任はマレク・ヤノフスキ)。

CDには、フランスの音楽誌でも最高のDiapason D'or賞やドイツ批評家賞を受賞した名盤、マスネの「シェルバン」(RCA、91年録音、92年リリース)等がある。

NHK交響楽団とは、1986年、1992年、1994年、1997年に共演。ブルックナーの《交響曲第4番「ロマンチック」》、マーラーの《交響曲第1番「巨人」》、R. シュトラウスの《英雄の生涯》などで名演を残した。8年ぶりの客演となる今回は、モーツァルト、ベルリオーズ、シベリウスの名曲を採り上げる。今年60歳になるマエストロの円熟の指揮が楽しみだ。

(山田治生)

ピアノ piano
コルネリア・ヘルマン
 Cornelia Herrmann



N響との初共演は2003年7月31日の安城と8月1日の四日市。ジェームズ・ジャッドの指揮、プログラムはモーツァルトの《ピアノ協奏曲第20番》K. 466だったが、豊かな情感ときめ細やかな哀愁を織り上げての印象的なデビューだった。今回は定期初登場となる。

コルネリア・ヘルマンは、ドイツ人の父、日本人の母をもって1977年ザルツブルクに生まれた。85年よりモーツァルトウム音楽院でピアノを学び、ザルツブルク青少年コンクールを初め、スタインウェイ・ピアノ・コンクール・オーストリア全国大会などで優勝を飾って世界的に注目された。さらに92年、イタリア・セネガリア国際ピアノ・コンクールで入賞を果たした後、96年にはドイツ・ライブツィヒで開催されたJ. S. バッハ国際コンクールで最年少(18歳)最高位(1位なし2位)を獲得、併せて2つの特別賞を受賞した。また99年モーツァルト国際コンク

ルでも特別賞を受賞。

これまでにボッフム交響楽団、リンツ・ブルックナー管弦楽団、カメラータ・ザルツブルク管弦楽団、イスラエル室内管弦楽団、中央ドイツ放送室内管弦楽団、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団、ウィーン室内管弦楽団、日本国内では神奈川フィルハーモニー管弦楽団、東京都交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団等とも共演しているが、2002年、2003年とザルツブルク音楽祭にも招待された。先般2005年6月紀尾井ホールのリサイタルでも聴衆の高い評価を得ている。今年CD「愛の挨拶」をリリース。

(真嶋雄大)

テノール tenor

ヘルベルト・リップパート

Herbert Lippert



N響の桂冠名誉指揮者、サヴァリッシュの秘蔵っ子と言われるリリック・テノール歌手である。1991年10月サントリーホール開場5周年記念日コンサートとして行われたサヴァリッシュ指揮N響によるハイドンのオラトリオ《天地創造》のソリストとして初来日した。95年11月のバッハ《ヨハネ受難曲》、2001年10月のメンデルスゾーンのオラトリオ《エアリア》におけるサヴァリッシュ&N響にもソリストとして出演しており、N響にはお馴染みの顔。また、生前のショルティ、シノポリはじめ、今や時代を担うアルノクール、ウェルザー・メスト、ラトル等からの信頼も厚く、2001年のラトル指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団来日公演《第9》ではソリストに指名された事実からも、資質に富む歌手と言える。

1957年リンツ生れ。ウィーン少年合唱団のソリストを経て、90年ウィーン国立歌劇場《魔笛》のタミーノでデビューし、一躍脚光を浴びた。その後、ミラノ・スカラ座、バイエルン州立歌劇場、

コヴェント・ガーデン王立歌劇場等の主要オペラ・ハウス、ザルツブルク等の音楽祭にも進出し、活躍の場を広げた。

サヴァリッシュのピアノ伴奏でリートのリサイタルも内外で行っているが、近年では2002年浜離宮朝日ホールでの鈴木大介のギター伴奏によるシューベルト《美しい水車屋の娘》が記憶に新しい。「透明感のある伸びやかな声が特色で、ギター伴奏の方が言葉がよく伝わり歌いやすい、と述べていた。学究肌ではなく、穏やかで気さくな人ですね」とは、鈴木氏のリップパート評。

2005/06シーズンは、小澤征爾指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とヴァチカンで教皇ベネディクト16世のために演奏、モーツァルト・イヤーはメータ指揮ウィーン・フィルで幕開けし、ルイージ指揮ウィーン交響楽団で幕を閉じ、アルノクール率いるコンチェントウス・ムジクスのコンサート・ツアーにも参加予定。ムーティとのケルビーニ作品新録リリースも控えている。

(菊島 大)

ヴァイオリン violin

ドミートリ・シトコヴェツキ

Dmitry Sitkovetsky



シトコヴェツキがN響に初めて登場したのは、1985年4月26日のNHKホールだった。ベリスラフ・クロプチャールの指揮でメンデルスゾーン《ヴァイオリン協奏曲》を演奏したのだが、その後も90年2月にミシェル・ブラソン指揮でチャイコフスキーの協奏曲を、97年10月にはドミートリ・キタエンコ指揮でベートーヴェンの協奏曲を、2000年4月にはエリアフ・インバル指揮でシオスタコーヴィチの《ヴァイオリン協奏曲第1番》を、そして一番最近では2002年1月パーヴォ・ヤルヴィとバルトークの《ヴァイオリン協奏曲第1番》を共演し、知的でなお情熱的、いずれも高い評価を得ている。

生まれたのは1954年9月、アゼルバイジャン共和国(当時はソヴィエト)のバクー。父は夭折したヴァイオリニスト、母は高名なピアニスト、ベラ・ダビドヴィチである。モスクワ音楽院に学んだ後アメリカに渡り、ジュリアード音楽院で

アイヴァン・ガラミアンに薫陶を受けた。79年の第1回クライスラー国際コンクール優勝を契機に演奏活動をスタートさせ、80年にはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団にデビュー、以降シカゴ交響楽団など世界的オーケストラと共演を重ねている。

指揮者としてもニュー・ヨーロピアン室内弦楽オーケストラやアカデミー室内管弦楽団と密接な関係にあり、フィンランドのコールスホルム音楽祭の芸術監督やベルファスト・アルスター管弦楽団首席指揮者などを務めた。

(真嶋雄大)

モーツァルト Mozart

セレナーデ ニ長調 K.239「セレナータ・ノットウルナ」

1776年1月、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)は20歳の誕生日を迎えるころ、《セレナーデ「セレナータ・ノットウルナ」》を作曲した。当時彼は故郷ザルツブルクで、宮廷作曲家としての任務を果たしていた。礼拝のための宗教音楽を作曲するほか、公的な祝賀や特定の行事のための機会音楽を作曲しなければならない。このうち、公的な祝賀用の音楽で重要な位置を占めていたのが、「セレナーデ」だった。

彼は1773年以降、毎年1曲セレナーデを作曲しており、この《セレナータ・ノットウルナ》は4曲目に当たる。「夜のセレナーデ」を意味するこの作品名は、自筆譜に父レオポルトの手で記入された。ただしこれが単に「夜の音楽」を指すのか、「ノットウルナ」がなんらかのジャンル名を示しているのか、またこの作品がなんの目的で作曲されたのかなど、詳しいことは分かっていない。

いずれにせよこの作品は、モーツァルトのセレナーデのなかでも特殊な作品となった。ほかのセレナーデが7楽章前後からなっているのに対し、この作品は3楽章しかない。弦楽とティンパニという楽器編成も珍しい上、バロック時代に

流行した「コンチェルト・グロッソ」の形態をとっている。これは協奏曲の一種で、独奏が複数の楽器群による。この作品では弦楽四重奏をとるが、チェロではなくコントラバスが使用されているのもきわめて珍しい。

全曲は次の3つの楽章からなる。第1楽章は、マエストーソ、ニ長調、4/4拍子。ゆったりとしたテンポの行進曲で、独奏楽器群と合奏が交替しながら展開する。第2楽章、メヌエット、ニ長調、3/4拍子。優雅だが堂々とした舞曲。中間部には、独奏楽器群だけによるトリオを挟む。第3楽章、ロンド、アレグレット、ニ長調、2/4拍子。軽快なテンポに乗せて民謡風の旋律が音楽を主導する。様々な音楽を織り合わせながら展開していくが、途中、ゆっくりとしたアダージョと急速な行進曲を挟むのが特徴的。

作曲年代: 1776年1月

初演: 不明

楽器編成: 独奏楽器群：ヴァイオリン2、ヴィオラ1、コントラバス1、弦楽合奏、ティンパニ1

(稲田隆之)

モーツァルト Mozart

ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

モーツァルトは1781年から亡くなる91年まで、主にウィーンで活躍する。このウィーン時代のモーツァルトは、宮廷などに就職をしない、いわゆる自由音楽家だった。そのため、経済的に不安定な生活を余儀なくされてしまう。そこでモーツァルトが利用したシステムが「予約演奏会」だった。貴族たちに予約名簿に登録してもらい、ある程度の収入を前もって確保する。その上で演奏会を準備するわけである。このとき、作曲家としても演奏家としてもアピールできる格好のジャンルこそ、「ピアノ(クラヴィール)協奏曲」だった。

《ピアノ協奏曲第23番》は、1786年の3月から4月にかけて企画された3回の「予約演奏会」のうち、いずれかの演奏会のために準備された。初演もそのいずれかで行われたはずだが、それがいつなのかについては不明である。またそのほかの作曲状況についても、よく分かっていない。

とはいえ、この頃のモーツァルトは、歌劇《フィガロの結婚》の作曲が佳境に入っていたため、きわめて多忙であったことは間違いない。そして《フィガロの結婚》でみられる充実したオーケストラの響きは、この協奏曲に影響を及ぼし

ている。クラリネットの使用はその一例である。

またこの協奏曲の特徴は、隙のない音楽構成にある。それを象徴するのは、独奏者が即興で技巧を披露する「カデンツァ」の扱いである。モーツァルトは第1楽章のものこそ自身で作曲したが、通常ありえないことに、それを直接スコアに書き込んだ。一方第2・3楽章では、本来入るべきカデンツァの場を想定していない。従って彼は、音楽構成から即興性を排除し、楽譜にできるだけ完成されたかたちを残そうとした形跡がうかがえるのである。

全曲は次の3つの楽章からなる。第1楽章、アレグロ、イ長調、4/4拍子。協奏的ソナタ形式をとる清らかな音楽。第2楽章、アダージョ、嬰へ短調、6/8拍子。哀調を帯びたシチリアーナ風の楽章。第3楽章、アレグロ・アッサイ、イ長調、2/2拍子。快活に展開するロンド。

作曲年代: 1786年3月2日完成、ウィーン

初演: 不明

楽器編成: フルート1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽、独奏ピアノ

(稲田隆之)

ベルリオーズ Berlioz 幻想交響曲 作品14

ベルリオーズ(1803-69)は多くの点で19世紀前半の音楽に革新をもたらしたが、その先進性を最もよく示しているのは管弦楽法のそれであろう。《幻想交響曲》はベートーヴェンの死のわずか3年後、1830年に作曲されているにもかかわらず、その音響の斬新さは《第9》をもはるかに凌いでいる。ベルリオーズは一般的な交響曲の楽器編成に、当時のフランス・オペラで用いられていた数々の楽器、そして発明されたばかりの楽器などを持ち込み、それを既存の楽器とうまく融和させた。《幻想交響曲》において、前者は鐘などの打楽器やイングリッシュ・ホルン、ハープ、後者はオフクレイドである(現在はバス・チューバによって代用される)。舞台裏から響くオーボエや、聞き慣れない管楽器や鐘の音、さらにはコル・レーニョなどの特殊奏法がコンサート会場に響いたとき、当時のパリの聴衆はさぞ驚いたことだろう。後年ベルリオーズは、自らの管弦楽に対する知識と、将来のオーケストラのあるべき姿に関する著作『管弦楽法』(1843)を発表するが、《幻想交響曲》はその理想を実現するための最初の1歩であった。

初演当時ベルリオーズは27歳。駆け出しの作曲家の作品を演奏してくれるような楽団などあるわけもなく、この演奏会

のために作曲家自ら会場とオーケストラを手配し、パリ音楽院演奏協会を組織した友人フランソワ・アブネックに指揮を依頼しなくてはならなかった。こうした手作りの演奏会ではあったものの、会場には当時名声をほしいままにしていたマイヤベーアやスポンティーニといった大物も詰めかけている。多くの自作が演奏されたが、《幻想交響曲》はそのなかでも最も注目を集め、第4楽章はアンコールに应えてもう1度演奏されたほどであったという。

「交響曲」という名前の通り、その形式はベルリオーズ以前の古典派の交響曲の体裁をそのまま踏襲している。第1楽章、第5楽章は自由なソナタ形式であり、第2楽章がスケルツォ、第3楽章がアダージョ、第4楽章が行進曲である(ベルリオーズはその楽章構成を、同じく標題的な要素を持つベートーヴェンの交響曲《田園》から借りてきた)。しかし、ベルリオーズはその初演時に「作品の劇的なプランの完璧な理解に不可欠である」として、曲全体の内容を解説したプログラムを聴衆に配っていることを考えれば、この作品は明らかに単なる交響曲の範囲を超えた標題音楽と考えるべきだろう。以下にこのプログラムを簡単に要約する。

精神病に悩まされている若い音楽家（ベルリオーズ自身のことを指す）が、夢の中に現れる恋人（当時片思いをしていた高名な女優ハリエット・スミソンのこと。後年結婚して一子をもうける）に恋いこがれる。恋人は「固定楽想（イデー・フィクス）」と呼ばれるモチーフによって表現され、絶えず男につきまとう（第1楽章）。街や野原にいても、恋人の幻影は男の前に姿を現し、男の心を騒がせる（舞踏会・第2楽章）。夕方、男は野原で2人の羊飼いが歌い交わす歌を聴く。このところ感じ始めた希望、自分の孤独、恋人の裏切りへの疑惑がない交ぜとなって男に襲いかかる（第3楽章）。自分の愛は報われないと悟った男は、アヘンによって服毒自殺を図るが、アヘンが致死量に足りず、幻影を見る。男は夢の中で恋人を殺し、死刑を宣告され、処刑台へと引きずられていく。致命的な一撃によって断ち切られる愛の思いを示すかのように、「固定楽想」の1節が最後に流れる（第4楽章）。男がやってきたのは魔女や化け物・亡霊たちによる夜の宴会（サバト）。そこにかつての恋人もやってくるが、その姿は変わり果て、高貴で控え目な性格はどこへやら（醜く変奏された「固定楽想」によってこの恋人の姿が描写される）。魔女たちは恋人の到着を喜び、

共に騒ぎを繰り広げる（第5楽章）。

このプログラムによってベルリオーズは、《幻想交響曲》が自らの失恋経験をもとにした自伝的作品であることを世間に明らかにした。交響曲に標題を与えること自体はベルリオーズの独創ではない。しかし、その作品の主題に自分自身を用い、作品に自伝的要素を盛り込んだことこそ、音楽史における新たなオリジナリティと言うべきだろう。作品にはっきりと自伝的要素を盛り込んだベルリオーズの手法と理想を受け継いだほぼ唯一の作曲家は、『管弦楽法』ドイツ語版でベルリオーズを擁護し、《英雄の生涯》など多くの自伝的作品を作ったリヒャルト・シュトラウスであった。

作曲年代: 1830年

初演: 1830年12月、パリ音楽院、
フランソワ・アブネック指揮

楽器編成: フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2+バンダ1、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2（Esクラリネット1）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、中太鼓、鐘、ハープ2、弦楽

（広瀬大介）

モーツァルト Mozart

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K.527

序曲、ドン・オッターヴィオのアリア「彼女こそわたしの宝」

モーツァルトがウィーン時代に作曲した《ドン・ジョヴァンニ》は2作目となるイタリア語によるオペラである。彼自身の自作品目録では「2幕のオペラ・ブッファ」と書かれているが、その音楽の内容の重さからオペラ・セリアという見方もある。ドン・ジョヴァンニとはスペインの高慢かつ残忍な色男ドン・ファンの中で、16世紀から17世紀に文学の題材として劇や小説に描かれた。モーツァルト版ドン・ファンはダ・ポンテの台本によるもので、正確なタイトルは「罰せられた放蕩者あるいはドン・ジョヴァンニ」という。色男のドン・ジョヴァンニの女癖の悪さからドンナ・アンナの父である騎士長を殺してしまう第1幕に始まり、最後はそれまでの罪の改悛を迫られるが、しかし言うことをきかない。最後には石像となった騎士長によって奈落へと落されてしまう。

序曲は序奏（アンダンテ）の緊迫した二短調の主和音の強奏から始まり、これは第2幕のフィナーレで騎士長の石像の登場する場面の音楽から取られ、その不気味な歩みやドン・ジョヴァンニの従僕レポレルロの恐れを表す部分が続く。主部（アレグロ）は一転して二長調へ転調するが、明るい

というより劇的な緊張感にあふれ、展開部では序奏部の暗い影を引きずるように進む。

「彼女こそわたしの宝」（アンダンテ・ソステヌート）は1788年4月24日、ウィーンのテノール歌手モレルラのために追加作曲されたアリアである。オペラの上演では劇的な必然性を欠くとして歌われないこともある。ドン・オッターヴィオが恋人ドンナ・アンナの幸せを祈る甘美な歌で、オペラ全体が男声の低音域に重心が置かれているため、唯一のテノールによるアリアは異彩を放っている。

今回は、レシタティーヴも演奏される。

作曲年代: 1787年

初演: 1787年10月29日、プラハ劇場

楽器編成: 序曲：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

レシタティーヴ：チェンバロ

アリア「彼女こそわたしの宝」：
フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽、テノール独唱

(三橋圭介)

モーツァルト 歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K.527より 歌詞対訳
Mozart from “Don Giovanni” K.527

訳：小瀬村幸子
Translation: KOSEMURA, Sachiko

DON OTTAVIO
Recitativo

ドン・オッターヴィオ
レシタティーヴ

Come mai creder deggio
Di sì nero delitto
Capace un Cavaliero!

一体全体、信ずべきなのか、
これほど邪悪な罪が
騎士たるものに犯しうると!

Ah di scoprire il vero
Ogni mezzo si cerchi;
io sento in petto
E di sposo e d'amico
Il dover che mi parla:
Disingannarla voglio,
o vendicarla.

ああ、真実を明かすための
あらゆる方策を見つけるのだ、
ほくは胸に感じる、
夫として、友としての
義務がほくに語りかけるのを、
彼女の思い違いを解くか、
でなくば彼女の復讐を果たすかしたいと。

DON OTTAVIO
Aria

ドン・オッターヴィオ
アリア

Dalla sua pace
La mia dipende,
Quel che a lei piace
Vita mi rende,
Quel che le incresce
Morte mi dà.

あのひとの安らぎに
ほくの安らぎはかかっている、
あのひとに喜ばしいことは
ほくに命をあたえ、
あのひとに不快なことは
ほくに死をあたえる。

S'ella sospira,
Sospiro anch'io;
È mia quell'ira,
Quel pianto è mio;
E non ho bene,
S'ella non l'ha.

あのひとが嘆き悲しめば
ほくも嘆き悲しむ、
あの怒りはほくのもの、
あの涙はほくのもの、
だからほくに幸せはない、
もしあのひとにそれがなければ。

モーツァルト Mozart

歌劇「魔笛」K.620

序曲、タミーノのアリア「なんと美しい絵姿」

《魔笛》はモーツァルトが生涯最後の夏に作曲された作品である。《フィガロの結婚》や《ドン・ジョヴァンニ》《コシファン・トゥッテ》とこの作品が違っているのは、オペラではなくジングシュピール、つまり歌芝居として書かれていることにある。それゆえ台本（シカネーダー）は他のオペラのようなイタリア語ではなくドイツ語で、伴奏の付いたレシタティーヴに代わってセリフが用いられている。この当時のジングシュピールは貴族たちが楽しんだ宮廷歌劇場のオペラより民衆的な内容が盛り込まれていたが、《魔笛》にもそうした滑稽なシーンがふんだんに取り入れられている。それと同時にモーツァルトはきわめて厳粛な内容も折り込み、他に類例を見ないほど多彩な内容の作品に仕上げている。

夜の女王の娘をザラストロの手から助け出そうと王子タミーノに救出を頼む第1幕、第2幕は救出に向かうタミーノとパパゲーノが高僧ザラストロの試練に身をゆだねる。前半が夜の女王を善、ザラストロを悪として扱い、後半ではその立場が入れ替わり、最後に夜の女王は奈落へと落ち沈み太陽が燦然と輝き終幕となる。

「序曲」（アダージョ）は、厳粛な3つ

の和音で始まる闇をさまようような混沌とした序奏部、続くアレグロの主部は輝かしいヴァイオリンのフガートによる第1主題が幅広く絡み合っ秩序ある音の世界を作っていく。「なんと美しい絵姿」（ラルゲット）は第1幕第4場で歌われるタミーノのアリア。3人の侍女が夜の女王の命により娘バミーナを救うために彼女の肖像をタミーノに与える。彼は彼女の美しさに心ときめく恋の感情を歌いあげる。

作曲年代: 1791年

初演: 1791年9月30日、ウィーン、アフ・デア・ヴァーデン劇場

楽器編成: 序曲：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽

アリア「なんと美しい絵姿」：クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽、テノール独唱

（三橋圭介）

モーツァルト 歌劇「魔笛」K.620より 歌詞対訳

Mozart from “Die Zauberflöte” K.620

訳：荒井秀直

Translation: ARAI, Hidenao

Tamino

タミーノ

Arie

アリア

Dies Bildnis ist bezaubernd schön,
Wie noch kein Auge je gesehen!

この絵姿はなんて美しいだろう、
まだ誰も見たことがないほど美しい。

Ich fühl' es, wie dies Götterbild
Mein Herz mit neuer Regung füllt.

この神々しい姿を見ていると、
今まで知らなかった心のときめきを感じる。

Dies Etwas kann ich zwar nicht nennen,
Doch fühl' ich's hier wie Feuer brennen.

これをなんと呼んだらいいのだろう、
それはわからないが心は火のように燃えている。

Soll die Empfindung Liebe sein?
Ja, ja, die Liebe ist's allein. —

こんな気持ちを恋というのだろうか、
そうなんだ、この気持ちこそ愛なんだ。

O wenn ich sie nur finden könnte!
O wenn sie doch schon vor mir stünde!

ああ、彼女に会えないものだろうか、
ああ、彼女が私の前に現れてくれないか。

Ich würde — würde — warm und rein —
Was würde ich? —
ich würde sie voll Entzücken

そうしたら—温かく清く—
どうするだろう?—
私は夢中になって

An diesen heißen Busen drücken,
Und ewig wäre sie dann mein.

彼女をこの熱い胸に抱きしめるだろう、
そうしたら私と彼女は永遠に結ばれるのだ。

モーツァルト Mozart

歌劇「イドメネオ」K.366

序曲、イドメネオのアリア「海の外なる胸の内の海は」

3幕からなるオペラ《イドメネオ》は25歳のモーツァルトが書いた唯一のオペラ・セリア。ザルツブルクの宮廷付神父ジャンバッティスタ・ヴァレスコのイタリア語の台本に基づいて作曲された。古代ギリシャを題材に、英雄であるクレタ王イドメネオ、息子の王子イダマンテと敵の王女イーリアの愛をとりまく苦悩と成就の物語を描いている。喜劇やハッピー・エンドを好んだモーツァルトらしく、本来は悲劇で終わる結末を「愛の勝利」に改編し、また重苦しい内容にもかかわらずどこか楽天的な感覚も生きている。

グルックが序曲をオペラの要約であることを要求したように、この序曲(アレグロ)には前作にはない豊かな楽想がオペラの内容と緊密に関係しており、以降の作品でこの路線は受け継がれている。曲は悲劇的なオペラの開始を告げるにふさわしい厳粛な雰囲気であり、半音階や音の跳躍、強弱の対比が海の嵐や劇的な物語を暗示的にしめしている。

「海の外なる胸の内の海は」(アレグロ・マエストーソ)は第2幕第3場でイドメネオが歌うアリアである。イドメネオの艦隊が嵐で難破し、海神に懇願した甲斐もあって岸に漂着したが、

海神との約束は最初に出会った人間を生け贄に捧げるというものだった。その人こそ息子の王子イダマンテであり、それと共に敵の捕虜だったイーリアが彼を愛していることを知り、イドメネオは悩みを深くする。このアリアは彼の英雄的心情と苦悩を歌ったもので、テノールのコロラトゥーラの妙技も味わうことができる。

作曲年代: 1780年

初演: 1781年1月29日、ミュンヘン宮廷劇場

楽器編成: 序曲:フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

アリア「海の外なる胸の内の海は」:フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、テノール独唱

(三橋圭介)

モーツァルト 歌劇「イドメネオ」K.366より 歌詞対訳
Mozart from “Idomeneo” K.366

訳：海老澤敏
Translation: EBISAWA, Bin

IDOMENEO

Aria

Fuor del mar ho un mar in seno,
Che del primo è più funesto.
E Nettuno ancor in questo
Mai non cessa minacciar.
Fiero Nume! dimmi almeno:
Se al naufragio è sì vicino
Il mio cor, qual rio destino
Or gli vieta il naufragar?

イドメネオ

アリア

海の外にも、わしの胸の中にもうひとつの海があり、
それは自然の海よりもいっそう悲しいもの。
しかもネプチューンはこの海の中でも、
けっして脅かすことを止めはしない。
誇り高い神よ！ せめて語り給え、
破滅に瀕しているのがわしの心であっても、
いかなる罪深い運命が
今わしの心にその破滅を拒んでいるのかを。

モーツァルト Mozart

交響曲 第41番 ハ長調 K.551 「ジュピター」

モーツァルトは1788年、最後の3つの交響曲——変ホ長調K. 543、ト短調K. 550、ハ長調K. 551を作曲した。『自作品目録』への記入はそれぞれ「6月26日」「7月25日」「8月10日」付。この日付は、3曲が非常に短期間で一気に書き上げられた印象を与える。だが、この3曲の自筆総譜には、87年12月に購入したと思われる用紙が使われており、作曲着手時期の上限をその頃に求めることも不可能ではない。

では、この3曲の交響曲はどのような目的で作曲されたのだろうか。作曲者本人からの情報は何もないが、一般に18世紀の作曲家は何らかの使用目的がなければ作曲の仕事はしなかった。現在では、作曲目的について3つの可能性が指摘されている。

- (1) モーツァルト主催の予約演奏会のために新作の交響曲を用意した。
- (2) 3曲1セットの交響曲集(=‘Opus’)として出版するために作曲した。
- (3) ロンドンへの演奏旅行を計画し、そのために新作の交響曲を用意した。

ウィーン時代のモーツァルトは交響曲の創作量が激減し、演奏会ではザルツブルク時代の旧作か他人の曲を使うこともあった。だが(1)は、確実な証拠

がないとはいえ、可能性は十分にある。(2)は、3曲という数が出版曲集用として当時の習慣上適していたことからあり得る話である。また、各曲の性格や特徴を考えた時、明暗の鋭い対比を織り込んだ変ホ長調、暗い情念が爆発するト短調、明朗、明晰さを押し出したハ長調と、各曲が相異なる風貌を持つと同時に、対位法的な発想に拘った立体的な書法、表出的な半音階への執着など、後期のモーツァルトを象徴するような特徴を共有している。(3)については、87年にモーツァルトのイギリス人の友人たちがウィーンから故国へ帰郷する途中でザルツブルクに立ち寄り、レオポルトに会ったことと関連する。彼らは、モーツァルトがロンドン訪問を希望していると父親に伝えたのである。この訪問は実現しなかったが、89年に行われた北ドイツへの旅行時、ドレスデンやライプツィヒなどでモーツァルトが演奏会を開いたことが分かっており、それらの機会で作成された3曲が披露されたと考えることは不自然でない。

《ジュピター》は、‘軍隊調’とも評すべき堂々たる風格に基本的な性格を求めることができよう。それは、‘軍隊調’の勇ましさを感じずにはいられないトゥ

ティと、しなやかな弱音楽節の対比に始まる第1楽章(4/4拍子のアレグロ・ヴァーチェ)ですでに明らかである。属調部分では、ユーモラスな性格による主題が2つ現れる。2つ目のものは、バスのためのコミカルなアリエッタ《御手への口づけが》K. 541(1788年5月付で『自作品目録』に記入)からの引用で、これは「展開部」での主要な素材となる。この楽章はオペラにおけるセリアの役柄(深刻な役柄で、貴族階級の人物)と、ブッフアの役柄(コミカルな役柄で、非貴族階級の人物)の対比が意図されているとも思えてくる。属調部分の真ん中で大がかりなトゥッティが爆発するところなどは、ブッフアの世界にセリアの世界が乱入してくるようなイメージがあると言えるだろうか。

へ長調の第2楽章(3/4拍子のアンダンテ・カンタービレ)は、2拍目でのアクセントを特徴とするサラバンド舞曲の性格による冒頭主題で始まる。この楽章の基調となる穏やかさは、しかしながら、不規則な拍節感と表出的な短調が組み合わされた転調楽節が影を落とす。

第3楽章(メヌエット 3/4拍子のアレグレット)は、ヴァイオリンだけの弱音という特異な開始をもつ。冒頭主題の下行

半音階が全体に使用されている点も異例と言って良い。トリオでは、木管が「シード」と終止形をいきなり奏するなど、非常にユーモラスな性格をもつ。第4楽章冒頭主題を先取りするかのような短調の部分も現れるが、これはそのシニカルな前兆と言うべきか。

第4楽章(2/2拍子のモルト・アレグロ)は、独立したコーダをもつ大規模なフィナーレ。冒頭主題の「ドーレーファーミ」音型がグレゴリオ聖歌に由来するとも言われ、しかも楽章全体が対位法書法に満ちているため、当時の聴き手はこの楽章から宗教的なイメージを抱いたかもしれない。圧巻は、提示部に現れた5つの旋律素材を使ったフーガ風の楽節がコーダに置かれていることだろう。その堂々たる終止は、この交響曲を、3部作全体を締め括るに相応しい。

作曲年代: 『自作品目録』への記入は「1788年8月10日」付。

初演: 不明(作曲者存命中に演奏されたことはおそらく確実だが)

楽器編成: フルーツ1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

(安田和信)

シベリウス Sibelius

ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47

1903年、ジャン・シベリウス(1865-1957)はこの《ヴァイオリン協奏曲》の作曲作業を進めていた時、ヘルシンキ管弦楽団のコンサートマスターで、著名なソリストでもあったウィリー・ブルメスターを念頭に置き、初演も彼に託すつもりであった。多忙なブルメスターは翌年3月の初演を希望していたが、当時経済的な苦境にあった作曲者はより早い時期での初演を行いたいとの希望を抱いていた。初演は結局1904年2月に行われたが、その際にソリストを務めたのはブルメスターではなく、ヘルシンキ音楽院教授のヴィクトール・ノヴァチェックであった。初演後、徹底的な改訂の必要を感じたシベリウスはその作業を1905年に完成し、10月に初演を迎えたのだが、この時も多忙なブルメスターとの予定が合わず、ソロはベルリン国立管弦楽団のコンサートマスター、カレル・ハリールが務めることとなった。作曲を鼓舞し続けたブルメスターはシベリウスに腹を立てて、この作品を取り上げることはついぞなかったという。今でこそ、最も人気の高いヴァイオリン協奏曲の1つとして知られた作品であるが、成立の背景には、シベリウスの改訂癖がなせる悲喜劇があったのである。しかし、ブルメスターと妥協をせずに改訂を行った点は、この作品を19世紀風なヴァルト

ゥオーゾ協奏曲の器のなかで、作曲者の初期と後期の作風が交錯する、非常にユニークなものとしたのは確かであろう。

第1楽章(基本的には2/2拍子のアレグロ・モデラート)は非常に自由な構成に基づくソナタ形式だが、すべての主題は、独奏ヴァイオリンによる冒頭主題に含まれる動機から引き出されている。木管群による序奏に始まる第2楽章(4/4拍子のアレグロ・ディ・モルト、変ロ長調)は3部形式により、作曲者らしい憂いを含んだカウンタービレが展開する。第3楽章(3/4拍子のアレグロ、ニ長調)は自由なソナタ形式によるが、2つの主題はいずれもリズム動機の執拗な反復が特徴的である。

作曲年代: 1903年から1904年2月の間。
1905年に改訂。

初演: 1904年2月8日、ヘルシンキにて、ヴィクトール・ノヴァチェックの独奏、作曲家指揮によって。改訂版の初演は、1905年10月19日、ベルリンにて、カレル・ハリールの独奏、リヒャルト・シュトラウス指揮によって。

楽器編成: フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽、ヴァイオリン独奏

(安田和信)

シベリウス Sibelius

交響曲 第2番 二長調 作品43

ジャン・シベリウス(1865-1957)の《交響曲第2番》作品43は、彼の7つの交響曲の中で最もポピュラーな作品である。交響詩《フィンランディア》(1900)と並び称されることもあるこの交響曲は、ロシアの政治的弾圧に対するフィンランド人の魂の抵抗の音楽といわれている。確かに、作品が創作された当時の時代背景としてまず指摘されなければならないのは、世紀転換期におけるフィンランドとロシアの政治的な緊張関係であろう。

ロシアの理不尽な圧政に苦しむフィンランド人の愛国的精神が交響曲に投影されていると解釈する向きは、シベリウスと同年代の作曲家、ロベルト・カヤヌス(1856-1933)にまで溯ることができる。カヤヌスによると、この交響曲の第2楽章は「われわれの時代を照らす太陽の光、そして花々の芳香を奪い取ろうとするロシアの不正行為に対する大いなる抵抗」であった。さらに、高揚と葛藤を繰り返すフィナーレの第4楽章は、苦悩を突き抜けて勝利へと至るフィンランド人の輝かしい未来を象徴する音楽なのであった。こうした解釈に対して、後にシベリウスは「《交響曲第2番》は魂の告白である」と述べるに留め

ているが、交響曲をフィンランドの歴史的コンテクストから理解する向きは、その後の作品受容に大きな影響を与えたといえる。

シベリウスが《交響曲第2番》の着想を得た正確な時期に関しては明らかでない。交響曲に現れるいくつかの楽想は、1900年から翌年にかけて、ベルリンとイタリアのラバロに滞在していた際に構想した《フェスティバル》(管弦楽のための4つの音詩)および《交響的幻想曲》のスケッチ帳に含まれていた。両作品とも未完に終わったが、それらの素材はやがて交響曲の楽想へと変化してゆく。そして1901年11月、シベリウスは友人のアクセル・カルペランに作品の創作状況を説明する際、《交響曲第2番》の名称を初めて用いるのである。その後、作品に大幅な手直しが加えられたため、年末に予定していた初演は延期。交響曲は1902年1月に完成し、作曲者自身の指揮で3月8日に初演、大成功を収めたのであった。

《交響曲第2番》に対する当時の批評家たちの評価はきわめて好意的であった。ネガティブな批評はただ1人、アラルイク・ウツガラが「第2楽章を縮小すれば

作品はさらに改善されるだろう」と述べたのみである。一方、カヤヌスやカール・フロデインといった当時のフィンランド音楽界の重鎮たちは、チャイコフスキーの《交響曲第6番「悲愴」》(1893)とのつながりを指摘しつつも、シベリウスの革新的側面に大きな称賛を送っている。また、交響曲が表している複雑な心理的内容と人間の崇高な精神に共感した批評家のエヴァート・カテイラは、作品を「現代の《英雄》交響曲」と呼び、20世紀における交響的ジャンルの新たな幕開けと評した。この交響曲がシベリウスの様式的発展の上で重要な位置を占めていることは、現代においても多くの評者が認めるであろう。1890年代の若きシベリウスが傾倒していたワーグナーやチャイコフスキーからの影響は薄れ、「清澄なモダニズム」ともいうべき独自の境地に1歩踏み出しているからである。

粗削りながらも力強く確信に満ちたシベリウスの筆致は、《交響曲第2番》の得難い魅力となっている。牧歌的情緒と雄大なる自然への畏怖・感動(第1楽章)、逃れ難い人間の宿命と内面の悲劇性(第2楽章)、嵐のようなうねりと静穏(第3楽章)、精神の高揚と苦悩、

そして歓喜のファンファーレ(第4楽章)等、あらゆる表現の限りが尽くされるが、朗々たる讃歌の内に決然と結ばれる終結部は特に圧巻であろう。

作曲年代: 1901年~02年

初演: 1902年3月8日

楽器編成: フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、弦楽

(神部 智)